教育

解答乱麻

品川女子学院校長　漆紫穂子

「チームの力」の勝利

オリンピック陸上男子四百㍍リレーをどう見たか。タナボタという人もいるかもしれないが、私の目には「チームの力」の勝利と映った。

タイム合計に勝るチームをしのぐため、日本チームは合宿でバトン中継を練習し、北京入り後も長時間共に過ごして心を合わせたという。こうして得られた「チームの力」が1×4を5以上にしたのではないか。

「チームの力」が個人の力を引き出すこともある。

女子ソフトボールの上野由岐子投手は壮行会の夜、「For the team」と書き残したと聞く。指の皮がむけても投げ続けた精神力の背景には、この「チームのために」という強い思いがあったのだろう。

学校は何を学ぶ場か。さまざまな個性が集う学校で学んでほしいこと、それこそが「チームの力」だ。

この思いから、私たちの学校では、クラブ活動や生徒主体の行事を大切にしている。生徒は授業中には学べない多くのことを学んでいる。「人をまとめる上で一番大切なのは相手の立場になること」「一人で抱えず、頼る勇気を持つことも大切」。生徒の言葉である。

チームで競争するさまざまなコンペもある。メンバー構成を見てもどこが勝つか予想できない。前に出すぎる子、引っ込み思案な子、互いの足りないところを補い合って、足し算が掛け算になることもあるからだ。

クラスの中に行動が遅く、何かとクラスメートに面倒をみてもらっている子がいた。心配していた私に、その子が言った。「私の長所はみんなを和やかにすることです」。目からうろこが落ちた。その子の周りはいつも優しい笑顔に満ちていた。一見マイナスと見えて、人の力を引き出し「チームの力」をプラスにする子もいると知った。

「チームの力」が生きるのは勉強も例外ではない。夏休みに4泊5日の勉強合宿があった。帰ってきた生徒が口々に楽しかったと言う。「60時間の勉強漬け」がである。「みんなと一緒だったから。思いがけない力が出た」と言うのだ。

「チームの力」の源となるのは、皆のためにという公の気持ちだ。それが自分の潜在能力を引き出してくれる。

子供に「自分の面倒も見られないのに人の世話どころでない」と言いたくなるときもあるだろう。しかし、人の役に立つ喜びを知ったことで目標を持ち、やる気を出す子も多く見てきた。

あるとき、中1が行事の班を決めていた。自分から輪に入れない子を気遣って、仲のよい友達と離れてその子と一緒に班を作った子がいた。その班は終始なごやかで楽しそうだった。

まとめ役になる子には共通点がある。「目標が見えている」「明るくて前向き」「思いやりがある」「人のせいにせず自分の役割に対する責任感がある」

そういう子には「チームの力」が集まってくる。

学校というプラットホームの上で子供たちにさまざまな体験をさせ、将来、日本というチームを支えるような人材を育てたい。

産経新聞
H20年9月10日